

<p><b>22日</b> <b>(日)</b></p> <p>ゼカリヤ 8章</p>	<p>「互いに真実を語り合え。城門では真実と正義に基づき、平和をもたらす裁きをせよ」(16節)。ゼカリヤは神の真実と正義がエルサレムの真ん中に置かれるビジョンを語る。そのとき「老爺、老婆が広場に座し、わらべ、おとめの笑いであふれる」と。わたしは日本の将来をどのように思い描き、祈っているだろうか。</p>
<p><b>23日</b> <b>(月)</b></p> <p>ゼカリヤ 9章</p>	<p>「娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。…高ぶることなく、ロバに乗ってくる。雌ろばの子であるろばに乗って」(9節)。主イエスが十字架を目指してエルサレムに入城した時、このゼカリヤの預言が成就した。戦車と軍馬を絶ち、諸国の民に平和を告げる真の王は、十字架の道を歩む方である。</p>
<p><b>24日</b> <b>(火)</b></p> <p>ゼカリヤ 10章</p>	<p>「わたしは、主にあつて彼らに力を与える。彼らは御名において歩み続けると、主は言われる」(12節)。ここで「彼ら」と呼ばれているのは、エジプトやアッシリアに散らされていた人々のこと。神は「彼ら」を贖い、口笛を吹いて集め、その心を喜びであふれさせ、「真の羊飼い」として養い、「彼ら」と共に歩む方。</p>
<p><b>25日</b> <b>(水)</b></p> <p>ゼカリヤ 11章</p>	<p>「わたしは二本の杖を手にして、一つを『好意』と名付け、もう一つを『一致』と名付けて羊を飼った」(7節)。神は、分断しているユダとイスラエルの民を「一致」に導き、諸国のすべての民に「好意」を示し続ける。しかし、その招きを拒み、神の憤りを招く民は誰のことか。今日、私に向けられている神の祈りを覚えたい。</p>

<p><b>26日</b> <b>(木)</b></p> <p>ゼカリヤ 12章</p>	<p>「天を広げ、地の基を置き、人の霊をその内に造られる主は言われる」(1節)、「わたしはダビデの家とエルサレムの住民に、憐れみと祈りの霊を注ぐ」(10節)。愚かな罪に沈み、自分で自分を救えずにいる人間を、清め、新たに生かすもの。それは、天地を造り、人の霊を造られた神が注ぐ、憐れみと祈りの霊である。</p>
<p><b>27日</b> <b>(金)</b></p> <p>ゼカリヤ 13章</p>	<p>「その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れを洗い清める一つの泉が開かれる」(1節)。「偽りの預言者」は、「欺くための毛皮の外套」を身につけ、「偽りの主の言葉と幻」を語るので、何ら人を救うことができない。人の罪を洗い清めることができるのは、神が開く泉から湧き出る命の水のみである。</p>
<p><b>28日</b> <b>(土)</b></p> <p>ゼカリヤ 14章</p>	<p>「その日は…夕べになっても光がある。その日、エルサレムから命の水が湧き出て…夏も冬も流れ続ける」(7、8節)。ゼカリヤは、すべての人の礼拝場所となる、新しいエルサレム神殿の幻を語る。自分を神とする人間のたくらみはすべて裁かれ、退けられ、真の神を神とする礼拝から、人びとを養う命の水が湧き出る。</p>
<p><b>29日</b> <b>(日)</b></p> <p>マラキ 1章</p>	<p>「わたしはあなたたちを愛してきたと主は言われる」(2節)。主の怒りを受けた民への主からの救いのメッセージ。主は形だけの礼拝でなく、「主はイスラエルの境を超えて大いなる方である」と心から悔い改め、賛美する群れを待っておられる。主の日、イスラエルへの招きを、共にいただきましょう。</p>